

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720148

研究課題名(和文)

フランス語における有標の不定名詞句について

研究課題名(英文)

On Marked Indefinite Noun Phrases in French

研究代表者

長沼 圭一 (NAGANUMA KEIICHI)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90514646

研究成果の概要(和文)：

2009年度は、フランス語において通常は冠詞付きで現れると考えられる形容詞を伴う名詞句が属詞位置に無冠詞で現れる例について考察を行い、拙論(2010)：「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」としてまとめた。

2010年度は、フランス語において通常はDEという形が現れる否定文の直接目的補語の位置に現れる不定冠詞UNを研究対象とし、拙論(2011)：「フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句UN Nについて」としてまとめた。

研究成果の概要(英文)：

In the academic year 2009, I made a study of French nouns modified by an epithet, which usually have an article, appearing as a complement without an article and as a result I wrote my article “On French nouns modified by an epithet appearing as a complement without an article”.

In the academic year 2010, I discussed the French indefinite article UN appearing in the direct object’s position of a negative sentence, where the form DE is usually expected to appear and as a result I wrote my article “On the French indefinite noun phrase UN N appearing as the direct object in a negative sentence”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：仏語学

1. 研究開始当初の背景

フランス語学において定名詞句の研究は多く見られるが、不定名詞句や無冠詞名詞句の研究は相対的に少ないと言える。無冠詞名詞句の研究については、Anscombe (1982) : 《 Un essai de caractérisation de certaines locutions verbales 》, Picabia (1983) : 《 Remarques sur le déterminant zéro dans des séquences en *il y a* 》, Giry-Schneider (1991) : 《 L'article zéro dans le lexique - grammaire des noms prédicatifs 》, Curat (1999) : *Les déterminants dans la référence nominale et les conditions de leur absence* など、いくつか興味深いものが見られるが、解き明かされていない問題も多く存在する。そこで、無冠詞名詞句に注目し、成句に現れるものではなく、生産性のある無冠詞名詞句を研究対象としてこれまで扱ってきた。無冠詞名詞句を生起の仕方によって分類し、文同格として現れるもの（拙論 (1999) : 「文に前置された文同格無冠詞名詞句とタイトル化された無冠詞名詞句について」）、独立した文として現れるもの（拙論 (2000) : 「独立無冠詞名詞句について」）、名詞同格として現れるもの（拙論 (2001) : 「同格として現れる無冠詞名詞句について—右方同格と前方同格—」）、コピュラ文の属詞として現れるもの（拙論 (2002) : 「コピュラ文の属詞として現れる無冠詞名詞句」）についてそれぞれ分析を行った。これらの研究成果を、それ以前に研究対象としていた限定詞を伴う固有名詞と併せて博士論文にまとめ、拙著 (2004) : 『フランス語における有標の名詞限定の文法—普通名詞と固有名詞をめぐって—』として出版した。

しかしながら、無冠詞名詞句の研究を通じて、Jeunot (1983) : 《 《 Il est médecin 》 (pourquoi pas ?) 》, Tamba-Mecz (1983) : 《 Pourquoi dit-on : "ton neveu, IL est orgueilleux" et "ton neveu, C'est un orgueilleux" ? 》, Boone (1987) : 《 Les constructions 《 il est linguiste 》 / 《 c'est un linguiste 》 》, Kupferman (1991) : 《 Structure événementielle de l'alternance UN / Ø devant les noms humains attributs 》 などのように、不定名詞句との対立を問題とする先行研究がいくつか見られた。すなわち、無冠詞名詞句を扱う場合であっても、無冠詞名詞句そのものとしてのアプローチだけでなく、不定名詞句側からのアプローチも試みる必要性が生じることがあるのである。このことから、本研究では不定名詞句を考慮に入れ、不定冠詞の性質について詳しく観察を行うことを試みた。それにより、名詞句全体に関わる仕組みが部分的に明かされ、今後発展させていくことが期待でき

ると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フランス語における不定名詞句に関わる用法のうち、不定冠詞の欠如も含め、とりわけ特殊な用法、いわば「有標」の用法と見なされうるものを研究対象とし、なぜそのような用法が可能であるかについて考察し、その理由を明らかにすることにあつた。これまで主に無冠詞名詞句について考察を行ってきたが、無冠詞名詞句を扱う場合であっても、無冠詞名詞句そのものとしてのアプローチだけでなく、不定名詞句側からのアプローチも試みる必要性が生じることがある。このことから、不定名詞句を考慮に入れ、不定冠詞の性質について詳しく観察を行い、それにより名詞句全体に関わる仕組みについて可能な限り明らかにすることを目標とした。

2009年度は、通常不定冠詞が付くはずの場所に付いていない例について考察を行った。フランス語においては、職業、国籍などは属詞位置では *je suis étudiant / il est Français* のように無冠詞となるが、このような名詞であっても形容詞が付いた場合は *je suis un étudiant japonais* のように不定冠詞を必要とする。しかしながら、*il était bon laboureur / j'étais petit garçon* のように形容詞を伴った名詞が無冠詞で現れる例も見られる。このような例において、なぜ不定冠詞を必要としないのか、不定冠詞の性質についての考察を通じて、不定名詞句と比較しながら、これらの無冠詞名詞句の例の正当性を解明することを目指した。

2010年度は、否定文中の不定名詞句について考察を行った。フランス語では否定文の直接目的補語の位置に現れる不定冠詞は *de* になるという規則がある。しかしながら、*je n'ai pas passé un bon week-end* のように、不定冠詞 *un(e)* や *des* が *de* に変わらず否定文の直接目的補語に現れる例も見られる。そもそもなぜ否定文の直接目的補語の位置に現れる不定冠詞は *de* になるのか、そして、どのような場合に *de* にならないのかについて解明することを目指した。

このような研究により、否定文中の *de* も含めて、不定冠詞の特徴について探り、無冠詞名詞句との比較を通じて、不定名詞句を使用するための制約について、とりわけ上述の例のようなコピュラ文の属詞位置、および否定文の直接目的補語の位置において解明することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は対象となる無冠詞名詞句、不定名詞句について、具体的な実例をもとに調査、

分析を行った。概ね手順は以下のようなものであった。まず、コーパスから対象となる事例を収集し、分類を行う。次に、関連する先行研究に目を通し、必要があれば参照する。その後、必要に応じて収集した事例に変更を施し、インフォーマントチェックを行う。以上の作業から得られた結果をもとに考察を行う。このように、事例を出発点とした研究を展開させることを重視した。

2009年度は、拙著(2004)：『フランス語における有標の名詞限定の文法—普通名詞と固有名詞をめぐって—』において、主たる関心事である無冠詞名詞句に関する研究の延長として、形容詞を伴った無冠詞名詞句を対象として取り上げた。このような名詞句は、性質上、不定冠詞付きの名詞句との比較対照が不可欠であり、この研究は単なる無冠詞名詞句の問題ではなく、不定名詞句の問題と大きく関わっている。

成句を除く、形容詞付きの無冠詞名詞句を調査対象としたが、Kupferman(1991)：《Structure événementielle de l'alternance UN / Ø devant les noms humains attributs》において無冠詞名詞句と不定名詞句の対立のある例として指摘されている例がそうであるように、人を表す属詞名詞句の例が主たる収集対象となった。このような例を、本、雑誌やデータベース等から収集した。収集された例に、不定冠詞を付けて言えるかどうかインフォーマントチェックし、言える場合にどのようなニュアンスの違いがあるかを確認した。無冠詞名詞句や不定名詞句について関連する先行研究を参照し、必要な情報を集めた。以上の過程を経て、得られたデータや結果をもとに分析し、考察を行った。

2010年度研究対象としたものは、否定文の直接目的補語の位置に現れる不定冠詞である。通常このような位置に現れる不定冠詞はdeとなるが、un(e)やdesの形で現れるものを見かけることがある。このような事例を本、雑誌やデータベースの中から収集し、un(e)やdesをdeに変えることが可能であるかどうかインフォーマントチェックを行い、入れ替えが可能である場合のニュアンスの違いを確認した。関連する先行研究を探して参照し、得られたデータからこのような不定名詞句の特徴について考察を行った。

4. 研究成果

2009年度は、フランス語において通常は冠詞付きで現れると考えられる形容詞を伴う名詞句が、属詞位置に無冠詞で現れる例について考察を行い、拙論(2010)：「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」としてまとめた。フランス語においては属詞位置に職業や国籍を表

す名詞が現れる場合 *Jean est médecin.* のように無冠詞となるが、この名詞が形容詞によって修飾されると *Jean est un bon médecin.* のように通常不定冠詞を伴って現れる。ところが、*J' étais si bon élève.* や *Il était petit garçon.* のように形容詞付きの名詞が属詞位置に無冠詞で現れる例も見られる。このような無冠詞名詞句には二種類のものがあり、一つは *J' étais si bon élève.* のように形容詞の性質記述機能が前面に出ているもの、もう一つは *Il était petit garçon.* のように形容詞と名詞によって一つのカテゴリーを形成しているものであり、この場合には全体で役割記述機能が働いている。

この考察において重要な点は、「性質記述機能」と「役割記述機能」という独自の視点を導入することにより冠詞が欠如している理由を明確に説明している点である。

2010年度は不定名詞句という視点からの考察を発展させ、否定文の直接目的補語の位置に現れる不定冠詞を研究対象とし、拙論(2011)：「フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について」としてまとめた。フランス語の不定冠詞は性と数にしたがって *un, une, des* という形で生起するが、否定文の直接目的補語の位置に現れる名詞につく不定冠詞は性・数に関わらず通常 *de* という形で表現される。しかしながら、このような環境においても、*un, une, des* の形で現れるものが見かけられる。このような例を収集し、これらの例を否定のスコープという観点から5つのタイプに大別した。その5つとは、否定が数詞に及んでいる場合、否定がどこにも及んでいない場合、否定が付加辞や副詞に及んでいる場合、否定が名詞の「名札」に及んでいる場合、否定が文全体に及んでいる場合である。

とりわけ注目すべきなのは、4つ目の否定が名詞の「名札」に及んでいる場合である。*Il n' y a pas de chef.* のような *de* を用いた通常否定文においては、名詞が表す対象の存在、すなわち対象の「量」あるいは「外延」が否定されているのに対し、否定が名詞の「名札」に及んでいる *Il n' y a pas un chef.* のような文は、「有能な人物はいるが、指導者という名にふさわしい人物がいない」という解釈となり、ここでは名詞が表す対象の「質」あるいは「内包」が否定されていると考えられる。このようなことから、不定名詞句 UN N と内包とのかかわりが観察される。

これまでフランス語学においては、名詞句の問題に関してはとりわけ定名詞句が研究の中心となっていた。そのような状況においては、無冠詞名詞句についての研究に加えて、不定名詞句についての研究を行うことは大いに有意義なことであったと考えられる。さらに、本研究においては、単に不定名詞句の

みを対象として扱ったわけではなく、それ以前に行ってきた無冠詞名詞句についての研究成果を応用した上で比較対照を行い、単なる冠詞の有無による名詞句の解釈の問題から一歩進んで、不定冠詞の性質の核心部分に触れようと試みたものである。このような研究を通じて、不定名詞句のみを扱った研究とは違った成果が得られ、名詞句に関する研究全体に対する意義が見出されたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 長沼圭一、「フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句UN Nについて」、『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』、査読無、第43号、2011、pp. 117-140.
- ② 長沼圭一、「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」、『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』、査読無、第40号、2010、pp. 113-135.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長沼 圭一 (NAGANUMA KEIICHI)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90514646